



1996.6.30

楽器のある風景

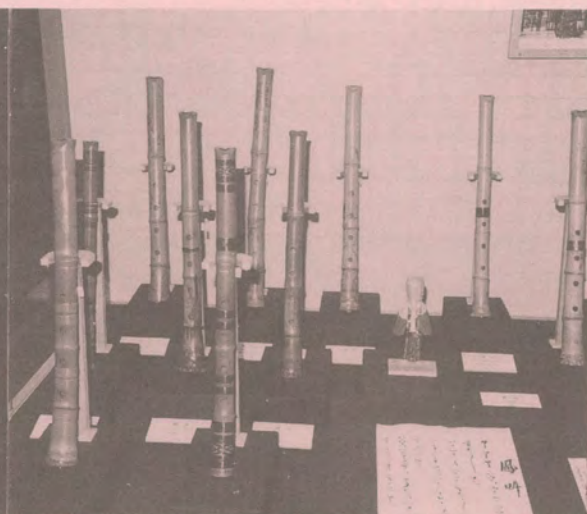


写真 左：市内若林町の秋祭り
右：尺八（当館所蔵品）

このコーナーも第3回目となりました。ポンパン（第2号）、鹿おどし（第3号）と偶然ですがどちらも竹製の楽器の話題が続いたので、今回も、引き続いて、竹製の楽器のお話をしたいと思います。

数年前のことになります。夜の8時過位にとある池の近辺を散歩していました。空は青暗く、月のみが明るく照って、水面をほんのりと浮かびあがらせています。私達は、池の周りに巡らせてある遊歩道へ降りて、なお、ゆっくりと歩いていました。

……とかすかに、何かのメロディーらしき音の連なりが、耳に入ってきます。普段この辺りで聞こえる音は、水辺に生えた植物が風に吹かれてさわさわ鳴る音、ウシガエル（15～20cm程の大型カエル）の“モー”というような鳴き声、遊歩道に響く自分達の足音などです。先程の耳慣れない音に注意を傾けると、どうやら池の対岸から尺八の音が聞こえてくるようでした。池のほとりから少し上がった所に広がる雑木林の中で、誰かが尺八を練習しているのでしょうか。何となく興味をそそられて、足が自然に音のする方へ向かいましたが、練習する人の姿は見当たりませんでした。

それにしても、夜の、静かな池周りに、不思議と尺八の音は耳にうるさくなく、自然の一風景を成しているようでした。そして、尺八の音はどこから？と、暗やみの中へ動物的鋭さで耳を立てる時、同時に池の辺りの空間が広がりを持って立ち上がり、音はその広がりの中を朗々と流れるのでした。

この時、私達は、尺八のあり方のある一面を理解したように感じました。

尺八は竹の一端が斜めに切られており、補強のために水牛の角が埋めてあります。ここへ息を吹きあてて音をだします。これだけの作りであるために、逆に、唇周りの調整によって、かすれたような音、明るい音、こもった音など、かなり変化に富む音をだすことができます。

夜の空気の中へこうした音がすべり込み、私達は自然の“風景”であるかのように、尺八の音を聞いたのです。

ところで、楽器博物館のある浜松市でも“風景”を感じるような音を何度か耳にする機会があります。一例として、神社のお祭りがあげられるでしょう。遠くからだんだん近づいてくる太鼓や笛（これも竹製）の音は、祭りの風景、情景としてみなさんの心に刻まれているはずです。

(O.K)

世紀末の画家グスタフ・クリムトを生んだ街ウィーン。そこからアウトバーンを南下すること一時間余り。古くから岩塩の産地として知られていたことから名付けられたといわれるザルツブルク。

イェルク・デームスさんの別荘は、眼下に湖が広がる山の頂にあり、はるか彼方は雪のアルプスが望める好ロケーションです。季節は一月、周辺は牧場との事。しかしながら、雪のため牛には逢えません。

真上からみると六角形とか八角形に見える家に入れていただくと、インテリアのすごいこと。ロココ様式を模した猫足の椅子、ローマの真実の口を模した壁、ペルシア絨毯、インドの大富豪の玄関等……。

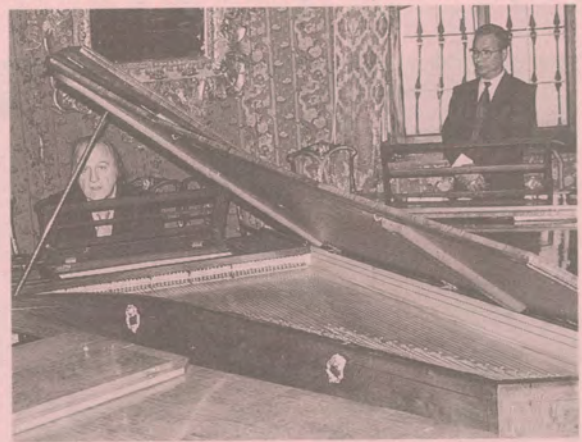
購入予定のエラールやシャリオのアップライトピアノは、優雅に装飾的に配されています。ホールには、アントン・ヴァルターをはじめとしたピアノが10台余押し合いへしあい。

デームスさんは、一台一台ていねいに弾いてダンパーの機能やアクション等に問題がないことを示していきます。また各ピアノがいつ頃のものであり、誰の曲目にあうのかを演奏・説明して下さいます。両者とも素晴らしいものでした。

後は、デームスさんお抱えの修理人に話を聞きます。修理の過程で使用した材料、接着剤等修復記録の作成です。これ以外にも、製造番号、サインなど分解過程で気づいたことなど書き留めていきます。

仕事を終え外に出ると、黄昏どきの風景、墨絵をみるようで素敵でした。

(O.G)



収蔵資料&展示コーナーの紹介

④

大 正 琴

私達が楽器を演奏できるようになるには、かなりの練習が必要です。例えば、ヴァイオリンは弦を押さえる所に印がないので、正確な音程で演奏するのは容易ではありません。そこで人は簡単に正確な音を出すために、弦を押さえる場所を示した「フレット」を考案しました。しかし人間の知恵はここで止まらず、弦を直接指で押さえる代わりに、鍵盤で押さえる楽器を考え出しました。この装置で音程を変化させ、右手で弦を弾くのが大正琴です。この仕組みだと誰でも簡単に正確な音が鳴らせます。

大正琴は名古屋の大須で発明されました。大須は「名古屋の浅草」ともいわれ、大正時代には、遊郭を中心とした名古屋随一の歓楽街として栄えた街です。そして大正期は、様々な珍品が発明された発明ブームの時代でした。そんな時世に、大正琴は幕末から明治にかけて流行した一弦琴(須磨琴)や二弦琴(八雲琴)に鍵盤を付けたものとして、1912年(大正元年)に森田吾朗(本名:川口仁三郎)により発明されました。大正琴は「和洋どちらの曲にも適し、誰にでも簡単に奏でられる楽器」をキャッチフレーズに、特に西洋にあこがれるハイカラな女性の間に急速に広まっていきました。当時、楽器を持つことは生活の豊かさを示す1つのシンボルでもありましたが、三味線は花柳界の楽器であり、ピアノやオルガンは非常に高価で、一般人には高嶺の花でした。しかし大正琴は2円という庶民的な価格で販売されました。また当時大流行していたマンドリンと音色が似ており、ピックで金属弦を弾くという演奏法が同じであったことも、普及の要因の1つといえるでしょう。

大正琴が発明されて約80年になる今日、大正琴愛好者は100万人以上ともいわれます。大正琴というと、どうしても年寄りじみたイメージが強いですが、最近雑誌の通信販売でよく見かけ、あらゆる年齢層に支持されています。また大正琴をかついで公民館に集まる熱心なおばあちゃんを見ると、生涯学習として最適な楽器ではないかと思えます。

(T.S)



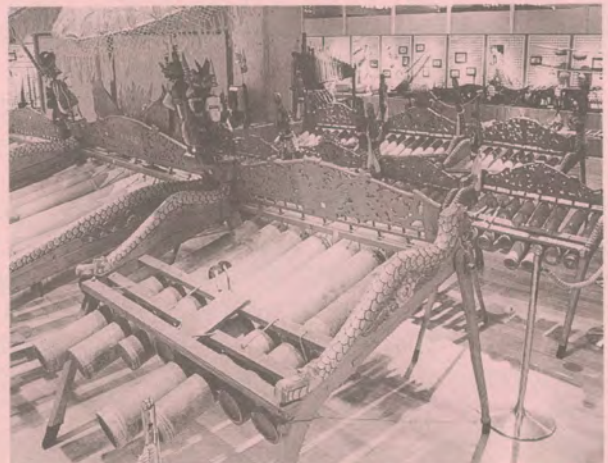
アジア・アフリカ展示室開設準備中！

現在、収蔵庫に眠っているアジア・アフリカの楽器が、いよいよ今秋、展示公開されることになりました。場所は第3展示室の半分強を使います。楽器博物館開館以来、アジアやアフリカ、またアメリカ楽器についての問い合わせや、展示の希望がたくさん寄せられており、できるだけ早い展示室開設が望まれていました。アジアやアフリカの楽器は現在も収集中ですが、すでに集めてある楽器を中心に、およそ170種類が展示される予定です。展示レイアウトのおおまかな設計が始まったところです。

浜松市楽器博物館のめざすところは「世界中の楽器のサンプルを展示し、楽器を通して人間の智恵と感性を考えること」ですから、アジア・アフリカの楽器が展示されることによって、楽器の誕生や東西交流の歴史が、今よりもずっとわかりやすくなることでしよう。

展示予定の楽器のなかで最大のもは、インドネシア・バリ島に伝わる竹の楽器ジュゴック。一番大きいもので直径16 cm 長さ170 cm の竹を8本ならべてたたいて音を出します。大小のサイズを組み合わせると合奏するのですが、その重低音の迫力はすごいものです。10月5日には、このジュゴックのレクチャーコンサートも予定されていますので、お楽しみに。

あと3ヶ月でオープンです。ご期待ください。



ジュゴック (オープン記念特別展での展示風景)

事業報告

- 「純正調オルガンと田中正平」 レクチャーコンサート 5月19日(日) 13:00~14:45 21音楽セミナー室
企画展 5月21日(火)~31日(金) 第3展示室

去る5月19日、演奏に武蔵野女子大名譽教授の伊藤完夫^{さだお}さん、おはなしに東京芸大教授の中井義幸さん、ピアニストの中村紘子さん、ヤマハ技術アカデミー講師の竹内明彦さんを招いて、レクチャーコンサートが開かれました。純正調オルガンは19世紀にヨーロッパで研究製作されていましたが、実際に演奏しやすいものを1890年に発明し、大センセーションを巻き起こしたのが、ドイツ留学中の田中正平でした。彼がドイツで製作したオルガン(リード式オルガンおよびパイプオルガン)は残念ながら1台も残っていませんが、昭和初期の日本製が4台残っており、この日はその中の1台(昭和13年製)を使用しました。

伊藤さんは田中博士の直弟子で、このオルガンを演奏できる唯一人の方です。90歳とは思えない元気なお姿で、バッハのコラールなど4曲を演奏されました。昔なつかしいあの足踏み式のリードオルガンの音ですが、やはり純正調での調律とあって和音の響きは格別。オルガンも古くなり、調律も少し狂っていたり本体も傷んでいるとのことでしたが、250人の聴衆は清らかな響きを体験できました。アンコールは即興で演奏。恩師田中正平博士の分身ともいえるこのオルガンを弾く伊藤さんの姿に、胸が熱くなる思いでした。

また、21日(火)から31日(金)までは、このオルガンと田中博士の資料を展示した企画展が開かれ、のべ2500人が見学しました。オルガン発明に対してドイツ皇帝ヴィルヘルム2世から贈られた直筆の勅語や、帰国後、邦楽の名人の演奏を5線譜に書き写したものの、また博士の写真など、貴重な資料が公開されました。平均律と純正調の和音の聴き比べコーナーでは純正調を実感。レクチャーコンサートの収録ビデオも放映され、一人の日本人がヨーロッパ音楽の世界に残した偉大な足跡を振り返りました。



- セミナー「楽器の中の聖と俗」第6回「愛を語る楽器」~中国の苗族の風俗から~

5月18日(土) 14:00~16:00 研修交流センター 講師:西岡信雄(大阪音楽大学教授)

- 小展示「楽器の科学」 4月23日(火)~5月31日(金) 第3展示室

音の出るしくみや楽器の構造について紹介しました。

- 体験学習「楽器の科学」5月11日(土) 14:00~16:00 第3展示室 講師:当館学芸員
音の出るしくみや楽器の構造について、実験を交えて学習しました。

お知らせ ———— 新しい楽器が常設展に仲間入りしました ————

ナチュラル・ホルン	1875年・フランス	ヴァルヴのついていない19世紀のホルン
狩猟・ホルン	1825年・ドイツ	直径60cmくらいの円形をした狩猟用ホルン
ポスト・ホルン	1890年・ウィーン	郵便馬車の発着の合図に使っていたホルン
アイダ・トランペット	1900年・ドイツ	ヴェルディのオペラ「アイダ」に使われるトランペット
バス・チューバ	1850年・イギリス	19世紀の初期型のチューバ

これからの事業スケジュール

- 平成8年7月13日(土) 14:00~16:00 研修交流センター(申込制)
 セミナー「楽器の中の聖と俗 第8回-大道芸の音と技-」講師:西岡信雄(大阪音楽大学教授)
 モロッコ、マラケシュの広場の風景から楽器の持つ聖(=神)と俗(=人)の2つの面について紹介します。
- 平成8年7月30日(火)~9月1日(日) 第3展示室
 小展示「金管楽器とサクソフォン」
 金管楽器の歴史や種類と、サクソフォンについて紹介します。
- 平成8年8月1日(木)、2日(金) 10:00~ 研修交流センター(申込制)
 講座「学校教育・社会教育のための博物館利用法-楽器博物館への誘い-」講師:当館学芸員
 学校教育や社会教育のための博物館利用法について協議します。
- 平成8年8月1日(木)~11日(日) 8月20日(火)~30日(金) 第3展示室
 夏休みワークショップ「楽器をつくろう」紙や木で簡単な楽器を作ります。
- 平成8年8月9日(金) 14:30~ 研修交流センター
 第9回レクチャーコンサート「サクソフォンの世界」
 サックス自身の製作したサクソフォンを使用した演奏とお話です。
- 平成8年9月7日(土) 14:00~16:00 研修交流センター(申込制)
 講座「日本の洋楽文化史」講師:塩津洋子(大阪音楽大学音楽文化研究室講師)
 日本の洋楽文化の歴史を考えます。
- 平成8年9月21日(土)(申込制)
 見学会「楽器製作現場見学会」市内または近郊の楽器工場、工房を見学します。

1月~5月までのあゆみ

- | | | |
|------|------|---------------------------------------------------------|
| 平成8年 | 3/24 | 体験学習「親子でつくろう創作楽器3-ハーモニカをつくろう」開催(講師:ハーモニカ振興会神谷嘉孝氏、当館学芸員) |
| 1/13 | | セミナー「楽器の中の聖と俗」第5回「鳥類と人類の音楽交流史」開催(講師:大阪音楽大学教授西岡信雄氏) |
| 1/20 | 4/23 | 小展示「新着資料展」開催(~4/7) |
| | 4/26 | 小展示「楽器の科学」開催(~5/31) |
| 2/8 | 5/11 | 浜松市楽器博物館運営協議会開催
体験学習「楽器の科学」開催(講師:当館学芸員) |
| 2/20 | 5/14 | 開館1周年記念演奏会開催 |
| | 5/18 | セミナー「楽器の中の聖と俗」第6回「愛を語る楽器」開催 |
| 3/2 | 5/19 | 第8回レクチャーコンサート「純正調オルガンと田中正平」開催 |
| | 5/21 | 企画展「純正調オルガンと田中正平」開催(~5/31) |
| 3/16 | | 第7回レクチャーコンサート「フランス・バロックの華-チューンパロとヴィオラ・ダ・ガンバ」開催 |
| | | 「県内芸能調査」中間報告会開催(講師:当館学芸員) |

利 用 案 内

開館時間:火曜日~日曜日 午前9:30~午後5:00
 休館日:月曜日(祝日にあたる時は開館)、祝日の翌日、年末年始、
 その他資料整備等のために定める日
 祝日前後の開館日については、変更することがございます
 ので当館にご確認下さい。

観覧料:	個人	団体(20人以上)	団体(80人以上)
大人(大学生以上)	400円	320円	240円
中人(高校生)	200円	160円	120円
小人(小・中学生)	100円	80円	60円

※館内には、貴重品以外のお荷物は持ち込みできません。

浜松市楽器博物館だより
 1996年6月30日発行

No.4

編集 浜松市楽器博物館
 〒430 静岡県浜松市板屋町108-1
 TEL 053-451-1128
 FAX 053-451-1129
 印刷 株式会社 シバプリント